## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	曹汝霖著 (曹汝霖回想録刊行会編訳) 『一生之回憶』
Sub Title	Tsao Ju-lin, The Autobiography of Tsao Ju-lin
Author	池井, 優(Ikei, Masaru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1968
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology ). Vol.41, No.6 (1968. 6) ,p.104- 107
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN00224504-19680615-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 曹汝霖著(曹汝霖回想録刊行会編訳)

## **『**一生之回憶』

土と化さねばならぬ場合も出て来よう。とになれば、「売国奴」の汚名を着せられ、亡命して 空しく 異国の境に制約されてその執つた行動が結果として歴史の流れに棹さすこを想い、自己の最善を尽しながらもそれが当時の国内事情、国際環政治家の評価はどのようにして決定されるのであろうか。常に国

ここにとりあげる曹汝霖はまさしくこういつた人物の典型であるよつて本書は、中国近、現代史の資料としても重要な意味を持つも事実を提供して資料の一端にしたいと思うだけである。……」(前言)なつただけで、論ずるに足らない。淡々として往事を追想し、ただ事も気にならなくなつた。抗戦中、多くの国人が義に赴むいて命を著者自身の言葉を借りれば「今は私も九十の老齢になり、毀誉も世事も気にならなくなつた。抗戦中、多くの国人が義に赴むいて命を著者自身の言葉を借りれば「今は私中、多くの国人が義に赴むいて命を書し、本のに此ぶれば、私がそした自伝『一生之回憶』によつてその足跡が、幸い彼が生前書き残した自伝『一生之回憶』によってある。

本書は二一章からなり次のように構成されている。第一章 少年

伏まで、第十九章 太和殿受降から台湾移転まで、第二十章 勃発、華北臨時政府成立、第十七章 会社社長就任—華北連合準備 変まで、第十五章 段祺瑞南下から逝去まで、第十六章 を出てから香港まで、第二十一章 留日八年。 銀行総裁を断わる―松岡洋右君と談る、第十八章 張作霖大元帥―蔣介石の北伐成る、第十四章 満州事変から西安事 大総統となる、第十二章 三角連盟から段祺瑞下野まで、第十三章 ら梁士詔内閣まで、第十一章 安直対立―徐世昌下野―曹錕賄賂で 会―徐世昌大総統となる―パリ平和会議、第十章 五四学生運動か 逝去まで、第八章 弾劾さる、第五章 商部事務官から対日満州会議まで、 時代から義和団事変まで、第二章 民国成立から二十一ヵ条まで、第七章 帝政運動から袁世凱 麦世凱罷免、再起用―清帝退位―清朝亡ぶ、第 黎元洪継任から張作霖入京まで、第九章 日本留学から帰国まで、 第四章 外務部に転任―御史に 日米開戦から降 日華事変 第三章 国門

自分で領土を保衛することもできないから、日本がわが国の領土を点を挙げて行きたい。まず一義和団事変で大きな衝撃を受け、曹は点を挙げて行きたい。まず一義和団事変で大きな衝撃を受け、曹は点を挙げて行きたい。まず一義和団事変で大きな衝撃を受け、曹は点を挙げて行きたい。まず一義和団事変で大きな衝撃を受け、曹は点を挙げて行きたい。まず一義和団事変で大きな衝撃を受け、曹は点を挙げて行きたい。まず一義和団事変で大きな衝撃を受け、曹は点を挙げて行きたい。まず一義和団事変で大きな衝撃を受け、曹は点を挙げて行きたい。まず一義和団事変で大きな衝撃を受け、曹は点を挙げて行きたい。まず一義和団事変で大きな衝撃を受け、曹は点を挙げて行きたい。まず一義和団事変を大きないから、日本がわが国の領土を

て、もしまた侵略に遇うようなことがあれば、互いに共同して防衛 回復するために起つて戦うという、 に、私は非常な慚愧と感激を覚え、今後も中日両国は提携合作し その大義の精神と、善隣の友

べる。

といかにして親日論者になつたか、その端緒を知ることが出来る。 私の親日観念は、この日露戦争を観て起こつたものである」(一五頁) □日本から帰国後、進士に合格、商務主事から外交部勤務となり

し、親仁善隣の義を失わないようにしなければならないと考えた。

れ、日中提携して対露防禦を行なうべきであると袁世凱に伝えるよ 対日満州善後会議随員と なるが、 その折小村全権 から 私的に呼ば

の一途をたどるのみであつたのは、まことに残念である」(三二頁) て斉駆するようになり、わが国は旧態依然、この好機を逸して、衰退 略協定を修め、さらに英国と同盟を締結するなど、欧米大国に伍し ついにわが国との提携をあきらめ、再び露国と旧交を温めて、不侵 流言を恐れる袁に時機尚早と云われ「この情勢を看取した日本は、 **う懇望され、その旨袁に伝えたが、権力の争奪に必死の清朝高官の** と、日露戦争直後が日中提携の一つのチャンスであつたことが指摘

思想も決して頑固でないと看取した。よつて戊戌変法の時でも、 納得するまで質問した。著者は太后が政治に強い関心を持ち、その て立憲について上奏したところ、太后は眼を輝かして陳述を聴き、 后の同意を得ることもできたのでは なかつたか。「維新の 諸君子は 梁啓超らが立憲政治を理解されるように説明していたら、 太 康

は

臼西太后に召見されるチャンスがあつたが、西太后の質問に答え

どうも急進し過ぎたように思われ、惜しい気がする」(四二頁)と述

ŋ, 認め、また採木公司も実情五十里を承認することで解決した。 策を進言した結果、安奉線は既得権、鴨緑江架橋は既定事実として 野心を憂慮し、慶親王総理、 ろが日本側は「私の満州調査の結果、多年の懸案が解決したのを喜 したため、人目をひき、京中あげて、私に『親日』のレッテルを貼 んで、私の昇進祝いといつた形で、しばしば私を招待してくれたり 四日露戦争後、著者は東三省視察に赴き、日本の中国植民地化 終世私の看板のようになつてしまつた」(五四頁)と事志とは別 那桐尚書に所見を報告し、 摂政王に対

に「親日家」にされてしまつた模様が描かれる。

は て、 良鑑『中国学生運動史』)の汚名を着せることになつたので、 模様である。著者が外交次長として実際の渉に当つた日華交渉の会 けている(七一一七二頁)。総統府、 態度が著者に『売国賊』(華崗『五四運動史』)あるいは 「敗類」(査 議の裏面が鮮明に描かれる。この二十一ヵ条要求時において執つた 一件だけで、 その他に 議定した 交換公文が 八件か九件あるに過ぎ いないし、実情を知らずして書いたもので絶対誤りであるときめつ 自己弁明しているところも 見られる。 特に いわゆる 第五号につい 田資料としても価値があるのは、二十一ヵ条をめぐる日華交渉の 陸が当時はまだ外交部に関係なく、この日の会議にも出席して 「著者が即時承認を主張した」とする羅光『陸徴祥伝』の記述 日露戦争の既得権である旅順大連租借権および満鉄の期限延長 国務院が一致協力して最終的に かなり

屈したということで、「親日売国」の名を 被せられたことへの 痛慣で、漫然と「二十一ヵ条国唇条件」と混称され、日本の最後通牒にず、国唇的な第五項は撤回させたにかかわらず、訛伝は訛伝を生ん

が語られている。

つているが、老友に対する不信も甚しいと言わねばならぬ」(九八頁) やまに早く即位するよう勧説し、袁はジョルダンが政府の密令を受皇帝に早く即位するよう勧説し、袁はジョルダンが政府の密令を受皇帝に早く即位するよう勧説し、袁はジョルダンが政府の密令を受皇帝に早く即位するよう勧説し、袁はジョルダン公使の秘密 在六巻二号 昭和三二年)などには見られない裏面の動きである。な エ六巻二号 昭和三二年)などには見られない裏面の動きである。な エ六巻二号 昭和三二年)などには見られない裏面の動きである。な エ六巻二号 昭和三二年)などには見られない裏面の動きである。な 正言は、本国政府の訓令を受けたものでなく、外交部も通さず、と 地言は、本国政府の訓令を受けたものでなく、外交部も通さず、と 地言は、本国政府の訓令を受けたものでなく、外交部も通さず、と 地言は、本国政府の訓令を受けたものでなく、外交部も通さず、と 大に談問反対を進言したが、袁氏が聴かなかつたのは惜しい』と、人に談問反対を進言したが、袁氏が聴かなかつたのは惜しい』と、人に談問反対を進言したが、袁氏が聴かなかつたのは情しい』と、人に談問反対を進言したが、袁氏が聴かなかった。

議の開催によつてこれを行なおうとしたが、これに失敗したため学している。段棋瑞勢力の制抑を考える徐世昌は、はじめ南北和平会生運動を前後両段に分け、後段は学生が利用されていたものと看做に描かれているが、著者は五四運動の起爆力となつたと見られる学紀一九一九年の五・四事件当日のデモ隊による暴行の模様は詳細

と激しく非難している。

生運動を利用して「私たち、段祺瑞の羽翼を切り除くと同時に、日生運動を利用して「私たち、段祺瑞の羽翼を切り除くと同時に、日生運動を利用して「私たち、段祺瑞の羽翼を切り除くと同時に、日生運動を利用して「私たち、段祺瑞の羽翼を切り除くと同時に、日生運動を利用して「私たち、段祺瑞の羽翼を切り除くと同時に、日生運動を利用して「私たち、段祺瑞の羽翼を切り除くと同時に、日生運動を利用して「私たち、段祺瑞の羽翼を切り除くと同時に、日生運動を利用して「私たち、段祺瑞の羽翼を切り除くと同時に、日生運動を利用して「私たち、段祺瑞の羽翼を切り除くと同時に、日生運動を利用して「私たち」、段祺瑞の羽翼を切り除くと同時に、日生運動を利用して「私たち」、段祺瑞の羽翼を切り除くと同時に、日生運動を利用して「私たち」、日本のおきには、日本のおきには、日本の表表を表表している。

(八一九二八年、張作霖爆死事件が発生するが、張作霖について著れ種々エピソードなどを交えてその人となりを語つている。著者は種々エピソードなどを交えてその人となりを語つている。著者をであろうし、少なくとも九一八(満州事変)を起すような下手なことはなかつたと、断言し得るように思われる」(一九一頁)とまでことはなかつたと、断言し得るように思われる」(一九一頁)とまでことはなかつたと、断言し得るように思われる」(一九一頁)とまでことはなかつたと、断言し得るように思われる」(一九一頁)とまである。

原外相から懸案解決のことを説かれて本国に報告したが、時機を失後楯があるとの答に憤慨して辞職し、あとを継いだ蔣作賓公使も幣険に出ることはあるまい、もしそんな行動に出れば国際連盟という部長に意見具申したところ、王の日本は恫嚇だけで満州に対して冒部長に意見具申したところ、王の日本は恫嚇だけで満州に対して冒部長に意見具申したところ、王の日本は恫嚇だけで満州に対して冒部長に意見具申したところ、王の日本は恫嚇だけで満州に対して冒い。

して九月一八日を迎えてしまつたとの指摘は、中国側の反省として

(十日華事変が開始されると、日本の出先機関は、

諸々に傀儡政府

であり、日本での放送、たれこ丁花、国共子技ところに合うでの機立を目指して「大物」と思われる人物を物色する。著者も華北の横立を目指して「大物」と思われる人物を物色する。著者も華北の横立を借りて号召し、政権を設立、日本軍の利用に甘んじて、革命元老を借りて号召し、政権を設立、日本軍の利用に甘んじて、革命元老を借りて号召し、政権を設立、日本軍の利用に甘んじて、革命元老の令名も惜しまず、かつ亡友(曾仲鳴)のために国家に叛いたのはでの令名も惜しまず、かつ亡友(曾仲鳴)のために国家に叛いたのはでの令名も惜しまず、かつ亡友(曾仲鳴)のために国家に叛いたのはで、王の後著省は、日本の放送、たれ上丁花、国共子技ところに合うである。「一七三百)。

米国に渡り、九○歳の天寿を全うしミシガン州ミッドランドの地でに移り、上海市中安定の報に大陸へ帰ることを決意するが、中共から逮捕状が出ていることを知り、香港に仮の住いを探すが、ここも負担にならぬよう生活の面倒まで見てくれることになつた。在日は負担にならぬよう生活の面倒まで見てくれることになつた。在日は自担にならぬよう生活の面倒まで見てくれることになつた。在日はのたに及ぶが、この間の日本の政治、社会情勢の変化、かねて親交のある吉田茂観など描かれる。その後大病の後七女の招きに応じてのある吉田茂観など描かれる。その後大病の後いわれる日本に行くのある吉田茂観など描かれる。その後大病の後いわれる日本に行うである。

数奇な一生を終る。

本書は、曹汝霖個人を中心に語られながら、そのまま清末から現代に至る、中国政治史であり、時には風俗史であり、明治・大正・代に至る、中国政治史である。ただ著者自ら「古いことで記憶が周昭和の日本の雑事録でもある。ただ著者自ら「古いことで記憶が周郎(正しくは財産三)(二二二頁、二二三頁)、北京政府顧問阪西利郎(正しくは財産三)(二十二頁、高州国国務院総務庁長駒井徳太たり(正しくは坂西利八郎)(二九二頁)、 また自己の信念から若干歴郎(正しくは坂西利八郎)(二九二頁)、 また自己の信念から若干歴中的事実に合わない見方、例えば一九四八年の二・二八事件をすべて共産分子の煽動と見なす(三四五頁)、また国民党の統治に対する批判がないなどの点が挙げられるが、個人の回想録という性質上や批判がないなどの点が挙げられるが、個人の回想録という性質上や批判がないなどの点が挙げられるが、個人の回想録という性質上や批判がないなどの点が挙げられるが、個人の回想録という性質上や批判がないなどの点が挙げられるが、個人の回想録という性質上や批判がないなどの点が挙げられるが、個人の回想録という性質上や批判がないなどの点が挙げられるが、個人の回想録という性質上や批判がないなどの点が挙げられるが、個人の回想録という性質上や

第者がミシガン湖のほとりで生涯を終り、また、著者とかつて行動を共にした外交総長陸徴祥が修道僧となつてベルギーの僧院で助き共にした外交総長陸徴祥が修道僧となつてベルギーの僧院であり、こで「政治家の評価はどのようにして決定されるのであるうか」との問を発して見たい気になるのである。(四○四頁、昭和四二か」との問を発して見たい気になるのである。(四○四頁、昭和四二か」との問を発して見たい気になるのである。(四○四頁、昭和四二十分○○円)、鹿島研究書出版会発行、一六○○円)

(池井優)